

# 棚田学会通信

第22号 2007年6月18日

発行/棚田学会

〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3  
(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



北アルプス連峰を望む青鬼の棚田

### ◆巻頭言

「棚田と茅葺き民家の青鬼 -長野県白馬村-」 白馬村村長 太田紘熙 ..... 2

### ◆会員通信

・「平成19年 能登半島地震による被害の状況について -輪島市門前町の棚田-」  
輪島市農林水産課 凌 信宏... 3

・「続・山形の棚田-樺平の棚田-」 山形県農村計画課 高橋信博..... 4

・「昔人の生きる力に学ぶ-明日香・稲渚棚田の報告に代えて-」 東京都江戸川区在住 伊東春海... 5

### ◆日本の棚田百選

・「栃木県那須烏山市国見の棚田」 那須烏山市経済環境部農政課 堀江豊水..... 6

### ◆官庁ニュース

・「新しい農業政策と中山間地域の農業について」 農林水産省農村振興局地域整備課 豊 輝久... 7

### ◆事務局ニュース

..... 8

・「平成19年度棚田学会大会」ご案内

・「第17回棚田学会現地見学会・シンポジウム-長野県千曲市 姨捨棚田」ご案内

## 巻頭言

### 「棚田と茅葺き民家の青鬼」

—長野県白馬村—

白馬村長 太田 紘熙

白馬（はくば）村は長野県の北西部に位置し、北アルプス白馬（はくば）連峰の麓でスキーや登山が盛んな村です。

昭和初期に白馬（しろうま）岳などへの登山のお客様を農家にお泊めしたことから民宿が出来、以来西山にスキー場を開き、リフトやゴンドラを整備し、日本有数のスキー場となりました。

平成4年には、387万人を超えるお客様が訪れる観光地となり、1998年長野オリンピックでは、アルペン、ジャンプ、クロスカントリー競技の会場地になり、特に団体のジャンプの逆転優勝は、私たちに大きな感動を与えてくれました。

今では、海外からもお客様が訪れる国際色豊かな村になり、観光地としての華やかさが定着しつつありますが、これから紹介を致します「青鬼（あおに）」は、全く違う一昔前の山村の民俗文化が残っており、訪れる人たちにやすらぎを与えてくれる集落です。

この青鬼集落へは、JR白馬駅より北へ向かい、姫川を渡って、青鬼沢を右手に1.1kmほどの山道を登った岩戸山の麓にあり、白馬駅から車で15分程の所にあります。

現在、14戸の茅葺き屋根（鉄板被覆）の民家と集落の東側山裾に棚田が続いています。

この地区は山間部にあるために水量が少なく、開田が難しかったようです。

江戸時代の文久4年（1864）に書かれた「青鬼新堰諸事覚帳」によると、4年の歳月と工事費88両をかけ、延べ1230.5人が青鬼沢から605間の青鬼上堰を開設し、7町歩の開田をすることができたと記録されています。工事は困難を極め、特に岩盤を石切職人や村人がノミで刻んだ157間には、今でもノミの後が残り、当時の苦労が偲べれます。また明治37・8年に青鬼下堰を開設し、石積みをして田を開き稲作の範囲を拡大しました。先人の米づくりへの情熱に改めて驚嘆せざるを得ません。

現在は耕作の不便さや後継者不足で、4.2ha、80枚の水田が耕作されており、以前より耕作面積が減っています。青鬼地区の棚田は、現地産の石を使った石積みや土坡の畦が混在して、棚田の畦工法の東西接点地域とも言われています。ほぼ垂直の石積みは、2mを超えるものもあります。他地区の棚田に比べ1枚当たりの面積が平均5.25aと比較的大きいです。

村では遊休地対策や特産品開発の一環として、古代米といわれる紫米をこの地区に導入し、村の特産品として生産全量を買上げ、「道の駅夢白馬」で販売をしています。紫米を使った「紫おこわ」は人気の商品となって

います。

担い手が不足して、長い2本の水路管理が難しくなりつつあるので、青鬼地区の春普請にボランティアを募集してきました。毎年20名前後が参加しての、堰清掃支援を行っており、地区の人たちと共同作業をしながら、堰の歴史を学んだりしています。

また、地区との交流を深めるために、休耕地を利用して紫米を植える「青鬼五月まつり」を行っており、今年で7回を数えます。早乙女の姿による田植えと棚田に映る残雪の北アルプスの風景は、何とも美しく感じられます。作業後のおむすびや山菜汁は格別で、地区古老の「お善鬼（ぜんき）さま伝説」や「堰開設苦労話」などは、大変興味深いものがあります。白馬北小学生による棚田の田植えも体験と研究のため行われており、秋にはお餅をついて、地域の皆さんをお呼びしての収穫祭は、ほのぼのとした温かみを感じます。

このような活動をしながら棚田保全に取り組んでいましたところ、平成11年7月26日に農林水産大臣より「日本の棚田百選」に認定されました。全国の棚田百選の一つに選ばれるとは、思いもよませんでしたし、とても光栄のことと思っています。後日、選定委員の一人である中島峰広先生が白馬村での講演の折に「青鬼地区の棚田の規模は小さいが、棚田と茅葺きの民家、そしてその背景にあるアルプスの山々が美しい。まさに桃源郷。」とお褒めのことばをいただきました。5月の新緑や10月の紅葉の時期には、小道や空き地にカメラマンやキャンパスを広げる芸術家が多く訪れています。本や雑誌などで青鬼の写真や絵を見ることも多くなりました。

集落の入り口付近には、向麻石仏群、阿弥陀堂石仏群、集落中ほどから石段を登るとお善鬼を祭った青鬼神社（9月20日の夜には、氏子が年番の家でお祭りに使う火を起こし、神聖な火を神に捧げます。火揉みの神事という）や善鬼堂遺跡、カツラの太木と湧き水、苦労して開設した青鬼上堰（着工した旧暦の10月9日にせぎ祭りを行い、氏神様に参拝し、この大事業を後世に伝えている。）・下堰、また茅葺き民家を改築したお善鬼の館など、山間部の農村文化が良く残っています。

さらに、この地域一帯は、平成12年12月4日文化庁の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。現在茅葺き民家や土蔵を保存するために、国の補助を受けながら修復をしております。

青鬼上堰を訪れ、足が竦む絶壁をくりぬいて作った水路のノミの跡を見るたびに、この地に力強く生きた先人の偉業に心を打たれます。重ねて申しあげますが、棚田からの萱葺き民家・その背景の北アルプス連峰・田んぼに映る残雪の山々の美しさは、別天地の様相です。

私はこの青鬼地区が、日本人の心のふるさとであり、原点ではないかと思っております。今後も棚田と茅葺き民家、そして集落一帯が心休まるふるさとであり続けることを願っております。

## 会員通信

### 平成19年 能登半島地震による 被害の状況について —輪島市門前町の棚田—

輪島市農林水産課 凌 信宏

平成19年3月25日午前9時42分頃、能登半島沖の深さ約11kmを震源とするマグチュード6.9の「能登半島沖地震」が発生しました。輪島市をはじめ、石川県では七尾市、穴水町で震度6強という非常に強い揺れに襲われ、死者1名、負傷者336名、住家被害は1万棟を越すなど、石川、富山、福井の北陸三県をはじめとして広範囲に被害が及びました。特に農林水産関係では、石川、富山、岐阜、新潟の4県において、農林道の損壊をはじめとした被害額は約142億円にもものぼりました(5月7日15時現在)。

輪島市は、市内のおよそ8割が山地を占める中において、国の名勝である「白米の千枚田」に象徴されるように、海岸線や山あいの谷筋に沿って小規模の水田を開いてきた水田地域で、古くから棚田が多く、その景観は「輪島朝市」や「輪島塗」とともに観光資源としての役割も担って来ましたが、半島の先端に位置し条件の不利な圃場が多いことから、農業者の高齢化と担い手不足は深刻で、耕作放棄地は年々増加の一途をたどっております。今回の能登半島地震では、傾斜の大きい棚田を中心に、農道の損壊や水路の破損、また田面の地割れ、更に、輪島市西部の門前町地区では家屋や納屋などの損壊が多く、震災をきっかけとして生活基盤を失った高齢農家の離農により耕作放棄地がさらに増えるものと見られ、従来から評価の高かった米づくりの基盤が衰退する危機的状況に陥っております。

これらを踏まえ、輪島市においては、国・県の支援を受けながら、水稲作付の空白期間を作らないように、関係機関が一体となり、農道や通水の確保、担い手による作業支援をはじめとした応急措置を行っているところです。

なお、今回の能登半島地震による棚田への影響は、地滑りによる畦落ちや地割れ、田面での液状化現象などがところどころで確認されています。また、田植えの時期を前に湛水を行った際の新たな畦落ちや、湛水不能になり水路からの水を吸い込んでしまう田、更には田面が波を打つようにゆがんだために湛水不能になるなどの特異な事象もみられました。今後も、梅雨期の長雨や台風による二次災害が予測され、稲刈りの日を迎えるまでは、棚田を守る農家にとっては、気の休まらない一年となりそうです。

ところで、輪島市では、国の名勝である「白米の千枚田」において、平成19年より棚田オーナー制度

を開始しました。幸いにも震災被害はなく、4月はじめの田起しから順調に作業が行われ、去る5月12日に行われた田植えには、東京をはじめ全国から訪れたオーナーをはじめ、地元のボランティアなどを合わせると、総勢約500名もの人々によって盛大に田植えが行われました。また、このオーナー制度には、昨年当地を視察された小泉純一郎前首相に特別名誉会員になっていただき、震災からの復興を目指す輪島にとっては、久々に明るい話題となりました。

今後は、当地区の良質米の生産基盤となっている棚田を少しでも多く守っていけるように、ハードの復旧はもとよりソフト面での支援を交えながら、一日も早い復興となるよう、鋭意取り組んでおります。



崖崩れ



地割れ



法面崩壊

## 続・山形の棚田

### 一 榎平の棚田一

山形県農村計画課 高橋 信博

今日は、「山形の棚田」のその後をお知らせします。前回お知らせしたのは、4年前だったと記憶していますが、この間、山形の棚田では、様々な変化がありました。

今回は、棚田百選「榎平（くぬぎだいら）の棚田」を舞台とした活動の経過について、まとめてみました。

#### 1. 榎平の棚田について

山形県朝日町は、町全体をエコミュージアム（生活環境博物館）と位置付け、町民主体のまちづくりを目指しています。棚田百選「榎平の棚田」は、棚田に隣接する展望地「一本松農村公園」からの棚田眺望とともに、朝日町の自慢のひとつになっています。もちろん、博物館の重要な展示品（サテライト）というわけです。

この小高い展望地では、山一面に「ヒメサユリ」が群生し、棚田の景観と併せ、住民と企業、そして行政やNPOが共働しながら保全活動を展開しています。

#### 2. ここの始まり（動機）

榎平では、稲作と果樹の複合で農業を営んでいます。若者世代は果樹に専念し、安い米、そして手間の掛かる棚田には目を向けません。

また、棚田百選認定後、たくさんの人が棚田を訪れるようになりましたが、あくまでも棚田は生産の場、見る側の都合にだけ合わせていけないという話しにもなりました。

とは言え、棚田のエリアにも、年々耕作放棄地が目立って来ました。

今、何とかしなければならぬ、みんなそう思っています。しかし、どんな方法で、どう解決していくか、話し合っても、明確な答えが出せずにいました。

#### 3. きっかけづくり（誘導）

地元と改良区から相談を受け、地元に入って聞き取りをしたところ…

- ① 手間（今以上の負担）はゴメンだ。
- ② 高齢者は、営農の継続を約束できない。
- ③ 若い者に後継して欲しいのだが。

結果、農家だけではなく、様々な立場の人を集めて棚田の将来を考えるワークショップを開くことにしました。

#### 4. そしてどう取り組んだか（経過）

まず、関係農家で棚田保全を推進していくための委員会を立ち上げ「棚田と地域の未来を考えるワークショップ」を開催しました。この時、初めて老若男女の枠を超えた参加者が、棚田のことを話し合ったのです。

ワークショップで出された提案を委員会でまとめ上げ、成果を発表するシンポジウムを開催しました。

250人の参加者の前で決意表明し、逃げられない体制を敷いてしまったわけです。中島峰広先生には「棚田の神様」として講演をいただきました。シンポジウムでは、ワークショップから生まれた、棚田ママの会のお披露目もあり、参加者の昼食に腕を振りました。その後、新たな視点で棚田を観る展望台や来訪者のためのトイレも、自費で設置しました。計画が実践に移行した瞬間です。

念願だった、地域あげでの「ヒメサユリ」祭りも開催しましたし、毎年継続していくことも約束しました。

労働力の補充に関しては、全国から「棚田保全隊員」を募集し、年間を通じた活動に参加してもらいました。労働力の対価として、「棚田チケット」を発行し、収穫感謝祭で棚田米や地域農産物と交換できる仕掛けです。今年も、約80名から申し込みがあり、6月の環境整備から作業が始まります。

昨年から、杭掛け棚田米として付加価値を付けた契約栽培も開始しました。あとは、後継者対策です。雰囲気は出てきました。あともう一步というところです。

#### 5. 大事なこと（展開）

きっかけから計画に、計画から実践に、実践から成果へ、その場面ごとに周囲からの支援がありました。今後は、独り立ちして継続できる体制を整備しなければいけません。

地元の努力も必要ですし、行政も一気に引き揚げるのではなく、いつでも相談役という立場でいるべきだと思います。事業がなくても、関係していけるのですから。

しかし現場では、継続できなくなった棚田百選の仲間も出現しています。地域住民同士も行政も、互いに補う関係が薄れたことが原因のように思えます。単独地区では無理なのかも知れません。いま、点を線でつなぎ、共存・競争・競演できる仕掛けが必要です。今年、山形版「棚田20選」を試みます。これをどうつなぎ使うか。またお知らせします。



棚田保全隊ひとコマ

## 昔人の生きる力に学ぶ

—明日香・稲渚棚田見学会の報告に代えて—

(平成19年3月31日～4月1日、28名参加)

東京都江戸川区在住 伊東 春海

近鉄奈良駅前をバスは明日香村に向かって出発した。雨上がりの道は真直ぐに何処までも伸びている。案内をしてくださった奈良女子大学の出田和久先生によれば、「この道は奈良時代の上ツ道にほぼ重なっている」という。ノガミ行事の話から大和国原の昔が蘇ってきた。

街中を抜け、曲がりくねった山道になった。目の前に石舞台古墳が微動だにしない姿を見せた。蘇我馬子の時代だ。奥明日香、稲渚の棚田はさらに飛鳥川を遡ったところにある。前方にジャンボ案山子が目に入ってきた。棚田に向かう前に、昨日の研究発表にあった勸請掛(かんじょうかけ)を見る。飛鳥川をまたいで注連縄(しめなわ)のようなものが張っており、中程に稲藁で作った特大の陽物(男綱)がぶら下がっていた。勸請橋の下を抜けると、眼前に稲渚の棚田が迫りくるように山の中腹に向かって広がっていた。

棚田を二分するように迫り出した朝風峠から見ると、かなりの勾配であることがわかる。まもなく、水を一杯に張った幾重もの棚田が現れるのだろう。涼しい風が吹き上げてくる。河岸段丘の底には、飛鳥川がひとすじ光っている。目を移すと勸請橋の上流に、人家が寄り添うように屋根を連ねている。汗が吹き出てきた。

稲渚・憩いの館で、大字(集落)の総代である寺西さんから棚田の保全とオーナー制度などについて説明があり、盛んに質問が出たが丁寧に答えてくれた。稲束を積み上げたものを「すすき」というが、これを表紙に使った「稲渚棚田ルネッサンス十周年記念誌」が配られた。ここまで来るには容易でないことが語られていた。困難を乗り越えて存続する棚田には共通点がある。地元地権者と都市住民、それを支える夢耕社の三者の存在だ。

村が仕掛け、村民挙げて応え、共鳴した第三者が支援する。故郷に対する思いや誇りがあるのであろう。みんなで力をあわせる「結」が生きていたのである。古代から続く明日香の地が、そこに住む人の気が、日本の故郷と呼ぶのだ。東京からもオーナーが来ると言う。それも荒起こしから脱穀まで年に15回近くになるそうだ。

「この棚田が日本で一番古いんじゃないかな」と中島副会長が切り出した。地元の寺西さんも本当のところ判らず困った様子。「5キロも上流から灌漑設備を造ったのも凄い、いつごろだろう」とつづく。そこで「あんな大きな石舞台を造った技術があるんだから、相当古いんじゃないかな」と言ってみた。伝統ある棚田でも、後継者不足やオーナーの作業回数が減ってきて

いる。昨日の「農村と都市をむすぶ棚田オーナー制度」を思い出した。4つの棚田の比較に、稲渚は「交流型」に分類されていた。棚田ルネッサンスに集録してある殆どが、オーナー体験記であることも頷ける、というもの。

世の流れには抗しようもないが、自分たちの暮らしが山の中に埋もれてよいものか、との思いがあるのだろう。その棚田でさえ、との感慨がよぎった。何ごとも前へ進むためには自転車のペダルをふみ続けることが大切、と教えているのかも知れない。地元の木材で造った憩いの館に別れ、さらに奥の飛鳥川上坐宇須多伎比売神社(あすかがわかみにいますすたきひめのみことじんじゃ)の氏子屋へ向かった。「さらら」の謂われ(昔この地を通して吉野に通ったという鶴野讃良、後の持統天皇より命名)を聞きながら、美味しい「さらら弁当」をいただく。

説明をくださったご婦人が、「ここで生まれたのに、このお仕事をさせて頂いてから、故郷の良さが分かってきたんです」とニコニコ笑っていたのが印象的だった。灌漑用水分水近くの勸請綱に、特大の陰物(女綱)がぶら下がっていた。人知を超えた領域への畏敬の念と、尊崇の思いを改めて感じた。

棚田学会現地見学会・研究会「奈良県明日香村稲渚の棚田」の旅が終わった。急峻な斜面に棚田を造り広げてゆく昔人。その土地でしか生きられない、生き抜くことそのものが、すべてを突き動かす原動力になっているのかも知れない。

「農村と都市をむすぶ棚田オーナー制度」前田真子氏(広島工業大学)、高尾堅司氏(川崎医療福祉大学)と、「奈良盆地の農耕儀礼とノガミ行事について」樽井由紀氏(奈良女子大学大学院)の発表は、とても勉強になった。たくさんの質問や意見、疑問点が出された。これも大いに勉強になった。稲渚の棚田と、研究内容を重ね合わせてみると、生きることへのこだわりの深淺の差を感じた。心して生きなければいけない、とつくづく感じた現地見学会であった。

多くの関係者にお世話になりました。お礼申し上げます。

平成19年桜花の頃



稲渚の棚田 (撮影: 今井英輔)

# 日本の棚田百選

## 栃木県那須烏山市国見の棚田

那須烏山市経済環境部農政課

堀江 豊水

清流那珂川の東側に位置する八溝山系の一角に、国見の棚田があります。

県都宇都宮市から約40kmの位置にあり、那須烏山市内からは約8km離れた中山間地域で風光明媚なところです。

国見の棚田面積は2.2ha、50枚の水田で形成され、日本の棚田百選に選ばれた後、平成12年度に中山間地域等直接支払交付金制度の知事特認地域として指定を受け、農道や水路の管理を組合員の共同作業を中心に、棚田の保全に努力しています。

国見の棚田の特徴は、棚田を見下ろす位置から見上げる位置まで農道があり、自動車で移動しながら、棚田の上段・中段・下段からの景観が楽しめることです。

当地域では、平成16年度から「とちぎ夢大地応援団活動事業（栃木県・栃木県農業公社）」に取り組み、30～40人のボランティアの方々を県内外から受け入れ、棚田周辺の環境美化の作業（草刈等）を行っていただき、毎年爽やかな汗を流していただいております。作業後は、地元自治会員と棚田保全組合員による「すいとん」の贈り、都市住民のボランティアの方々との楽しい交流の時を持っています。

平成18年度は、棚田ネットワーク代表の中島峰広先生紹介のアストラゼネカ（株）の社員の方々約60人のボランティアも受け入れ、都会に住む職員の方には初体験の草刈などを行っていただき、中山間の谷間に徐々に20代の若い男女の楽しい笑い声が響き渡り、地元の高齢者もワクワク・ニコニコしていました。さらに、作業後は日本最北端と云われる「国見の観光みかん園」で、みかん狩りを行い地元みかん組合の方との楽しい交流が行われました。観光みかん園は10月下旬から12月中旬頃まで開園し、毎年多くのみかん狩客が訪れ賑わいます。

棚田周辺の自然環境の維持・管理ばかりではなく、平成18年度は「那須烏山市まちづくり研究会（宇都宮大学・宇都宮共和大学・作新学院大学・足利工業大学・国際医療福祉大学）」の協力を得て、まちづくりの研究に取り組んでいますが、その中のひとつとして、足利工業大学の福島二朗先生の発案による棚田を活かした風景を作り上げようと、鯉のぼりの設置を行っています。鯉のぼりは広く市民に協力を得て寄贈していただいたものと、当市の特産品である烏山和紙を利用

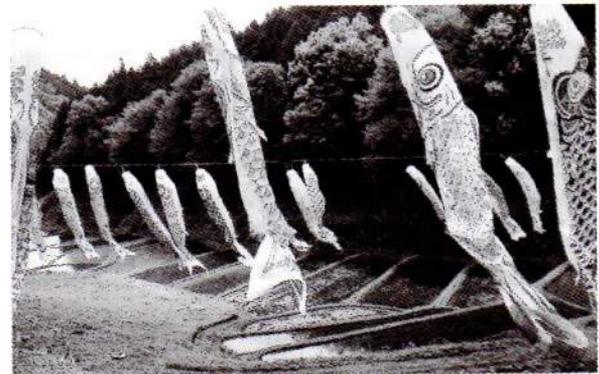
して作った鯉のぼり約100匹が4月下旬から棚田を横断し、元気に泳いでいます。

10月には、「残したい風景～からすやまフォトコンテスト」も当国見を会場に行われ、棚田のほか多くの残したい風景の作品の応募があり、当日は展示会場の長峰ビジターセンター（国見地内）は出展者と見学者で賑わいました。

これら多くのボランティアの方やまちづくり委員会の方々の協力を得て、今後も美しい棚田の保全に努めてまいりますので、「鯉のぼりと棚田」・「みかん棚田」の風景を見に、是非お越し下さい。地元の方も、「一回見に来たらがんばー」と言っております。



とちぎ夢大地応援団の皆さんと稲刈り後の一コマ



棚田に泳ぐ鯉のぼり

### インフォメーション

\*\*\*\*\*

雲南省昆明の雄大な棚田を背景に！

#### 雲南の少女 ルオマの初恋

【公開日】2007年06月16日（土）

東京都写真美術館ほか、全国順次ロードショー

中国・雲南省の雄大な棚田を背景に、少数民族・ハニ族の少女ルオマ（17才）が、都会から来た青年に恋をする淡い初恋ものがたり。

予告編はこちら…

<http://www.oricon.co.jp/cinema/trailer/d/403/>

## 官庁ニュース

### 新しい農業政策と 中山間地域の農業について

農林水産省農村振興局地域整備課  
課長補佐（中山間事業調整班担当）

豊 輝久

農林水産省は平成17年10月に経営所得安定対策等大綱を省議決定し、平成19年産から品目横断的経営安定対策、米政策改革推進対策、農地・水・環境保全向上対策を導入することとした。

品目横断的経営安定対策は、施策の対象となる担い手を明確化した上で、担い手の経営全体に着目し、諸外国との生産条件の格差から生ずる不利を補正するための対策となる直接支払いを導入するとともに、収入が減少した場合の影響を緩和するための対策を実施するものである。具体的には、都府県においては4ha以上の経営を行う認定農業者または20ha以上の経営規模をもつ特定農業団体等に施策の対象を限定し、麦、大豆の生産条件格差分の直接支払いを導入するとともに、米、麦、大豆の収入減少影響緩和対策を実施するものである。ただし、中山間地域においては、認定農業者の場合は4haの概ね8割まで、特定農業団体等の場合は10haまで、経営規模要件が緩和されている（なお、多くの特例措置が存在するので、詳細は農水省HP等でご確認頂きたい）。

また、米政策改革推進対策については、品目横断的経営安定対策が導入されることに伴い、産地づくり対策の見直し、集荷円滑化対策の実効性の確保等を行うものである。

さらに、農地・水・環境保全向上対策については、過疎化・高齢化・混住化等の進行に伴う集落機能の低下により、農地・農業用水等の資源の管理が困難になってきていること、また、この資源の上で営まれる農業生産活動について、環境保全を重視したものに転換していく必要があることから、地域ぐるみでの共同活動と農業者ぐるみでの先進的な営農活動について支援を行うものである。

上記3政策は、まさに今春から本格実施されているが、この新しい農業政策の導入と中山間地域の農業や農村集落との関係について、見解を申し述べたい。

まず、品目横断的経営安定対策は、担い手に施策を集中化することで、中小農家や中山間地域の切り捨てにつながるのではないかとこの見方がある。これについては、上述した緩和措置や特例措置が設けられているほか、集落営農としてまとまった形で対

策に参加できることとなっている。中山間地域では、農業者の高齢化や過疎化が顕著に進行し、集落によっては農業の担い手が存在しないというケースも見聞しているところであるが、このような場合には、隣接集落とで集落営農組織を作る、集落間や平地農村と連携した法人化を進める等、地域において合意形成を進め、対策対象の農業経営体となれるよう知恵を絞って頂きたい。集落営農組織等を立ち上げることが出来ない地域においては、少量多品目生産や有機農業等を実施するなど中山間地域の自然、景観、環境といった特性を活かした農作物の栽培を行い、これらを消費者に顔の見える形で販売することなどによって、農業収入を確保し、認定農業者になることも考えられる。いずれにせよ、地域の工夫と努力に応じて、対策に参加することは可能となっており、担い手になることを含めて農業者の意志が尊重される枠組みとなっている。

一方、農地・水・環境保全向上対策は、農業者、集落等を中心として多様な主体が参加する活動組織の共同活動と化学合成農薬と化学肥料を慣行農法から原則5割以上減らした環境保全型農業に対し、支援を行うものである。本対策は農地・農業用水等の資源を継続的な営農が可能となる良好な状態に保全し、また、併せて農村環境も生態系や景観等に配慮し保全する施策である。しかし、本対策を通じて実は農村コミュニティが一番保全されるのではないかと考えている。中山間地域では、農業者の減少、高齢化が平地より進行し、営農が行われなくなり、耕作放棄地が増加、そして農業用水路の泥上げ、草刈り等の集落共同活動が減少してきた。共同活動の減少に伴い、集落内での話合いや人付き合いも減り、農村コミュニティが弱体化してきた。本対策の導入により、共同活動が復活し、そして農業者だけでなく地域住民等の多様な主体が活動に参加することで、世代間を超えた新たな農村コミュニティが再生されるものと期待される。また、本対策に加え、中山間地域では中山間地域直接支払制度が既に実施されているとともに、都市と農村の交流や定住を促進する農山漁村活性化法も国会で成立をみたところである。これらの施策を活用するとともに、自然環境や景観、特産物などの中山間地域の特性を活かした農業や環境保全型農業を展開することにより、活力ある中山間地域の農業と農村を再生することが出来る。まさに中山間地域の総合力が試される時期であり、頑張る地域を様々な形で支援を行ってまいりたいと考えている。

## 事務局ニュース

### 平成 19 年度棚田学会大会

日 程) 8月5日(日)

場 所) 三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

- ◆平成 19 年度棚田学会総会 (13:00 ~ 13:55)
- ◆棚田学会賞授賞式 (14:00 ~ 14:50)
- ◆シンポジウム「棚田と生き物」(15:00 ~ 17:45)
  - ◇報 告
    - 嶺田拓也  
(農村工学研究所農村環境部  
環境評価研究室 主任研究員)
    - 大澤啓志  
(慶應義塾大学 教授)
    - 安井一臣  
(バイエルクロップサイエンス 研究開発 技術顧問)
  - ◇パネルディスカッション
    - コーディネーター  
山路永司(東京大学大学院 教授)
    - パネラー 嶺田拓也、大澤啓志、安井一臣

#### 〔主 旨〕

棚田は独特の生き物の宝庫である。カエルやトンボもいれば、トウキョウサンショウウオやハッチョウトンボが生息している棚田もある。しかし棚田は耕作放棄の危険性を抱えている。放棄されると水条件が変わり植生が変わり、そして動物類も変化する。

講演では、農地、特に水田における生き物にはどのようなものがあるか、どのように生きているかを説明いただいた上で、棚田独自の生き物について述べていただく。そして、棚田独自の生き物の生態系は、なにゆえに独自なのか、その貴重性と危険性(脆弱性)とを教えてください。

パネルディスカッションでは、植物と小動物・昆虫との相互依存性を議論したうえで、水田生態系、棚田生態系のあり方へと論点を広げてゆきたい。

(要予約・入場無料/一般は資料代 1000 円)

#### ◆懇親会 18:00 ~ 20:00

場所) 不二の間(同7階) 会費: 5000 円

### 第 17 回

#### 棚田学会現地見学会・シンポジウム

—重要文化的景観の指定を目指す

長野県千曲市・姨捨棚田—

日 程) 平成 19 年 9 月 15 日(土)、16 日(日)

場 所) 長野県千曲市姨捨地区

宿 泊) 杏泉閣(稲荷山温泉)

費 用) 8,000 円(宿泊費、懇親会費)

定 員) 30 名(定員になり次第×切)

#### ◆シンポジウム

「姨捨棚田の保全

—名勝指定から重要文化的景観指定へ—

日 時) 9 月 15 日(土) 13:30 ~ 16:30

会 場) 千曲市八幡 JA 千曲八幡支所

報告① 姨捨棚田の魅力

中島峰広(棚田学会会長代行)

報告② 棚田保全の試み

—名勝から重要文化的景観へ—

木村和弘(信州大学) 他

総合討論

#### ◆見学会

日 時) 9 月 16 日(日) 8:30 ~ 15:30

見学地)

①棚田の水源・大池(ため池)

②姨捨の棚田散策(JR 姨捨駅—姪石地区(名勝指定地)—整備された棚田—四十八枚田地区(名勝指定地)—長楽寺(名勝指定地)—観光会館)(移動はマイクロバス)(小雨決行)

〔主 旨〕姨捨棚田は、平成 11 年名勝「姨捨(田毎の月)」として、棚田で初めて国の名勝に指定され、また、同年「日本の棚田百選」にも選ばれた日本を代表する棚田です。今、姨捨棚田では、平成 17 年に新たに文化財となった文化的景観として、棚田での重要文化的景観の選定第 1 号を目指して、検討が行われています。棚田地域の面積約 75ha を中心に、棚田地域を潤す用水源と周辺の森林、そして湧水を貯留するため池を含めた広大な地域一帯を文化的景観とした保全する計画が策定されつつあります。

今回の棚田見学会では、姨捨棚田の魅力とその周辺の水源等の景観を楽しむと同時に、棚田保全の試みを報告し、参加者の皆さんとの意見交換を行いたいと考えています。

**編集後記:** 私は 0 千枚田のオーナーになって 9 年になります。先日田の草取りに行きました。天候は雷雨なのに大勢のオーナーさんが合羽を着、鎌や草刈り機で作業をしていました。畦にはアザミやショウブ、その間をまだ尾っぽのついたニホンアカガエルがピョンピョンはね回り、トウキョウサンショウウオもたくさん泳いでいました。作業が終わると雨は上がり、お昼にはおにぎりとお腹いっぱい頂きました。今年の大会シンポジウムは「棚田と生きもの」がテーマです。皆様のご参加をお待ちしています。(T)